



235号

2018 / 7 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



**黄河で石を拾う伏羲河村の子どもたち** 2013年春、私は間もなく延川県文化局での任期が終わるので、別れを告げに村を訪れると子どもたちが川辺で沢山の綺麗な黄河の石を拾って、いくつかを私に記念にするようにと選ばせました。その後、この写真の女の子たち4名は皆大学に受かり、その内の一人は私が勤めていた安徽财经大学で学び、2016年卒業しました。現在は西安市で仕事をしています。

(2013年4月、陕西省延安市伏羲河村黄河岸边 撮影：周路氏)



附：周路先生は、2005年、陕北黄土高原の女の子たちをテーマに「陕北娃娃」という著書を出版しました。キーワード「陕北娃娃」で検索、最終章「夢はるか遠く～通学路3」に、写真撮影した時の情景が書かれています。又、この時、先生が訪れた伏羲河村の紹介記事(合肥晚报記者：左澤華)もキーワード「伏羲の故里—忘れてはならぬ村」で検索できます。伏羲と女娲の古代神話を伝える村でしばし遊んで涼を得てみませんか。(田井)

‘わんりい’ 2018年7月号の目次は24ページにあります

今月は、<sup>ménting ruò shì</sup>門庭若市（メンティンルオシ）です。門庭は、中国語では門前、若市は‘市の如し’です。日本語では、その意味を取って、門前成市、門前市を成すという言葉を使っていますね。本の中のお話は、次のようなものです。



戦国時代、齊の国の宰相<sup>すうき</sup>鄒忌が、威王に進言しました：「私は元々、城西に住む徐公のように美男子ではありませんが、私の周りの人達は、皆、私の方が徐公より美男子だと言います。これは彼らが皆、私に彼らに便宜を図ってやることを期待して、私におべっかを使い、本当のことを言わないからなのです。私の周りですえ、こんな状態です。王様は権力者ですから、王さまを恐れ、良く思われたいとおべっかを使う人はもっともつ多いでしょう。王様がそういう人たちに騙されてはいけません。王様は、もっと多くの人達の忌憚のない意見を聴くべきです」

齊の威王はそれを聴いて尤もな意見だと思い、直ぐにお触れを出して、「齊王の過ちを指摘した者には褒美をとらせる」と知らせました。そのお触れが出ると、多くの人達が威王に諫言（目上の人に意見を言い、過ちを改めさせる）しようと集まって来て、朝廷の門前は、毎日、市場のように賑わいました。



言葉の意味は：門前や庭先が、市場のように賑やかである、人々との交流が盛んで訪ねて来る人がとても多い様子をいう。

使用例：毎年、中国芸術祭の開催期間中、国家博物館は毎日門前市を成す賑わいだ。



毎月、『名牌小学入学必备：成語（有名小学校入学準備必携：成語）』という本から、順番に四字成語の説明を紹介しているのですが、度々、これが幼児向けの本なのかと疑ってしまいます。しかし、この本の表紙にはちゃ

んと、『幼稚園教育指導要綱（試行）』および『小学課程標準』準拠と謳っています。

それにしても、幼い子供たちに見返りを期待しておべっかを使う人のことなど、どう教えるのでしょうか。教育の現場に立ち会ってみたい気がします。具体的にどういことかは説明しないで、ただ昔の人がこう言っています、とだけ教えるのでしょうか。

以前、中国では、物事を一面からだけ見て判断することとはしないで、必ず多面的に見て対処する人が多いと聞いたことがあります。民族的な傾向だそうです。そんな傾向が、小さい時から、このような話を聞くことで磨き

がかかるのでしょうか。

そういえば、「塞翁失馬」という四字成語があります。日本語でも「塞翁が馬」といいますね。良いことの後には悪いことが来るとい視点から、「<sup>じんかん</sup>人間万事塞翁が馬」とか「<sup>あざな</sup>禍福は糾える縄の如し」とか、良いことと悪いことが交互に起こる可能性を強調していますが、中国では物事の二面性を強



調して、「次に何が起こるかは予測不可能」という意味にとるそうです。

清朝が崩壊して、中華民国が建国されたころ、日本に亡命していた仲の良い中国人兄弟の兄だけが帰国することになりました。弟の友人だった日本人が、「どうして一緒に帰国しないのか」と尋ねると、「中華民国が出来たといっても、未だどうなるか分かりません。今は兄だけが帰国して、祖国の建国を見守る方が良いのです。その間に、私は日本での足場をきちんと確立することができますから」と答えたそうです。

これが日本人だったら、仲が良ければ良い程、「一緒に帰国して二人そろって祖国の建設に協力しよう」という気持ちになるのではないのでしょうか。とかく日本人は、何か起こると、熱くなって突き進む性癖があるようです。その点、事態がどう転んでも困らないように準備がちゃんと出来る中国人は、やはり人生の達人ですね。

Jìn wú wǎng yě  
進 吾 往 也すす わ ゆ  
進むは吾が往くなり〈子罕第九〉うえだ あつ お  
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

昔、日本でもよく使われた諺に「九仞の功一簣に虧く」というのがあります。せっかく苦勞して積みあげた大きな築山も、最後の一盛りが足りなければ、すべてが無になる。これは儒教の經典『書経』に出てくる言葉で、原文は「為山九仞，功亏一簣 (Wéi shān jiǔ rèn, gōng kuī yī kuì)」(山を為ること九仞，功は一簣に虧く)。「仞」とは、人が両手を広げたときの長さで、身長とほぼ同じです。「九仞」とは15メートルくらいの高さでしょうか。「簣」とは人が担いで運ぶ小さな竹かご状の入れ物です。その一かごの土が足りないだけでも、築山は完成しない。「亏」とは欠けること、足りないことです。少しでも欠ければ完成とは言えません。したがって、そこでやめてしまえば、それまでの労苦はすべて水の泡となります。何事も手抜きは禁物、最後の一押しが肝心ということ。「功亏一簣」は今でもよく使われる中国の四字熟語の一つです。

これに類する言葉は『論語』にもあります。「譬如為山，未成一簣，止吾止也 (Pì rú wéi shān, wèi chéng yī kuì, zhǐ wú zhǐ yě)」(譬えば山を為るが如し。未だ成らざること一簣、止むは吾が止むなり)〈子罕第九〉。「止吾止也」とは、誰のせいでもない、自分の力が足りないからでもない。つまりそれは自分の意志でやめたからだ、という意味です。この一文の要諦は、完成できなかった原因を、実行する人の意志に在るとしているところです。これは恐らく弟子たちを励まして言った言葉と思われる。

別の所で孔子は次のように言っています。ある時、弟子の冉求が孔子に自分の力不足を訴えました。「非不说子之道，力不足也 (Fēi bú yuè zǐ zhī dào, lì bù zú yě)」(子の道を説ばざるに非ず。力

足らざるなり)〈雍也第六〉。先生の教えを実行したくないわけではありません。実行したくても私の力が足りないのです、と。これに対して孔子は答えます。「力不足者，中道而废。今女画」(Lì bù zú zhě, zhōng dào ér fèi. Jīn nǚ huà)」(力足らざる者は、中道にして廃す。今女は画れり)。力不足というのは、自分で見切りをつけて勝手にやめてしまう者のことだ、今お前は自分の力に限界を設けているだけだ、と。

冉求は孔門十哲の一人で、政治にも外交にも優れた能力を持っていましたが、やや内向的な所があったので、孔子はしばしばこのように言って彼を励ましていました。

さて話を「一簣」に戻しましょう。孔子はさらに次のように続けています。「譬如平地，虽覆一簣，进吾往也 (Pì rú píng dì, suī fù yī kuì, jìn wú wǎng yě)」(譬えば地を平らかにするに、一簣を覆すと雖も、進むは吾が往くなり)。一方、地面を平らにする際、ほんのわずかな土を掘り返したとしても、それは自分が実行した結果である。つまり、自ら進んで行った事実は、たとえそれがささやかなものであっても、それなりの意味があるということです。

ここで孔子は二つのことを言っています。この二つは互いに矛盾しているように見えますが、実は一つにつながっています。あるいは、一つのことを二つの側面から述べていると見ることもできます。何事も最後までやりきらなければ意味がない。一方、最初の一步を踏み出さなければ何も始まらない。だから始めることには、そのこと自体に意味があるということです。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

四川省に来て、五日目(10月23日)の朝を迎えた。山小屋風の竹園酒店の朝食は麺であった。まだ10月下旬というのに、標高があるからか朝晩はかなり冷え込み暖房なしではいられなかったので、熱い麺は体を温めてくれありがたかった。

竹海は、「海」という名前が付くだけあって面積は広大でいくつもの観光ルートがある。どのコースにすべきか分からないのでホテルに聞くと、すぐ近くに「仙女湖」と書いてある扁額の掛かった入口があるので、そこから歩いて仙女湖から仙寓洞を廻るコースを勧められた。言われた門から入ると、すぐ両側に鬱蒼とした竹林が出迎えてくれる。そのうち敷石が赤褐色の散歩道がどこまでも続く。周囲の竹林とのコントラストが素晴らしい。左右を見ても上方を仰いでも竹ばかりである。今まで各地を旅したがこのような観光地はまだ見たことがない。竹海の名に恥じぬ光景だ。まさに海の形容がピッタリである。

10分余り歩いて行くと仙女湖が見えてきた。結構大きな湖の奥まったところに銀色の横座りした仙女のモニュメントが望まれる。竹取物語のような仙女の言い伝えがありそうだが教えてくれそうな人は周囲にはいない。湖のほとりに着くと竹で組んだ筏が置かれている。そこから対岸までロープが張ってあり、この筏に乗った女性がロープを手繰り寄せながらゆっくり筏を進めていく。ものの数分で対岸に着き、そこからまた歩き始めた。これだけ竹がありながらパンダは生息していないらしい。パンダの好む竹と種類が違うのかもしれない。そのうち彫刻された赤褐色の岩が続く仙寓洞に着いた。お釈迦様の涅槃像もある。滝がそこそこに流れ落ちており、アップダウンはあるが空気は新鮮で散歩コースにはもってこいのルートである。お店もなく商業化されていないのもよい。約2時間の行程でホテルの近くに戻ってきた。どこを見ても竹・竹・竹なので竹に酔ったような気分になった。

今日は、成都まで戻り初日(19日)に泊まったホ

テル「成都城市理想酒店」に行くことになっている。午後1時10分に、竹園酒店そばのバス停から宜賓行きのバスに乗り込んだ。半日ではあったが竹林の風景はとても名残惜しい。右に左に竹藪を見てパンダでも出てこないかな、と思っているうちに1時間半くらい経ってようやく宜賓に到着。バスの停まったところは、停留所の表示は無かったが、止まったところにもう1台のバスが待機しておりそれに乗り換える。うまく接続するものだ。友人が言うには、このバスは高速道路を走るがそれでも約4時間かかるとのこと。地図で見ればほんの数センチだが、宜賓から成都までは約300キロの距離がある。

夕方7時頃、成都市内のとある場所にバスは停まった。停留所の標識は無かったが何人か荷物を持って下りている。友人が我々もここで下りると言うので続いて下りた。運転手が「ここで下りてこの道をまっすぐに行くと地下鉄があるからそれに乗るとホテルの近くに行ける」と、友人に言ったらしい。中国は何かにつけて大雑把であるが、今日もずっとこんな調子であり、友人の言うとおりに素直に付いていくしかない。だいたい停留所の標識のないところに停まるのは、日本も今では余程田舎を走るバスしかないのではなからうか。我々3人はキャリアバッグを引きながら7～800メートル言われたままに歩くと地下鉄の看板が見えてきてホッとすする。地下鉄に乗り、幾つ目かの駅で下り地上に出る。歩いている人にホテルを聞くとすぐ分かった。到着して私はロビーの椅子に座ってゆったりしていると、友人がそばに来て「フロントが外国人は泊められない、と言っている」という。19日に同じメンバーで泊ったことであるし予約してあるわけで、何度も交渉するがフロントも「不好意思(すみません)」ばかりでダメな理由は言ってくれないそうだ。3月号で「成都城市理想酒店」が、2度と泊まりたくないホテルとなった、と書いたのはこのことである。何が理想だ! 看板に偽りあり、である。外国人差別ではないか!



どこを見ても竹、竹、竹



私の誕生日会  
(7と1のローソクに火を点けた)

店を出てホテルに向かう途中、大連市にもある「好利来」という有名なパンやお菓子を売っている店があり、皆で中に入って行く。実は今日は私の71回目の誕生日なのである。友人は10人くらいが食べられそうな大きなケーキを買い、「7」と「1」のローソクを付けてもらった。小さなケーキでいいと言ったのにやはり中国人は見栄っ張りである。早速私の部屋に集合し、誕生日会が始まった。7と1のローソクに火を点け部屋

仕方なく友人が旅行社に電話して、近くのホテルを紹介してもらった。3人はまた外に出てキャリーバッグを引きずりながらあちこち探し歩いていると、八宝街という広い通りに面した「八宝大酒店」というホテルにやっと到着した。このホテルも断らなければいいかと思っていると、フロントは何事もなくあっさり手続きしてくれた。夜も8時を既にまわっていた。友人が言うには、今北京では10月24日まで第19回党大会を開いており、その関係で何か影響があったとしか考えられない、と言う。日本では考えられないことが中国ではよく起きるので気にはしないが・・・

さて、夕飯にしようと呼び出されると友人が若い女性をつかまえて火鍋の美味しい店を聞いている。女子大生であるその女性が言うには「蜀大侠」がお勧めと言って、親切にも店の前まで連れて行ってくれた。道々友人はその女性と話をしている。彼が言うには、彼女が近々大連に旅行するというので、微信でアドレスを交換したと言う。中国人は見知らぬ人でもすぐ友人となる特技がある。お店に入ると例によって“喧噪”がお出迎えだ。随分混んでいたが何とか席が確保でき、友人が注文すると顔が歪むくらい辛い火鍋が運ばれてきた。よくこんなものを毎日食べて胃がんにならないものだと感心するしかない。

のライトを消す。もう一人の友人がスマホで「ハッピーバースデー」の音楽をかけながら歌ってくれ、いやが上にも楽しい雰囲気になった。そして火を吹き消す。明かりが点いた部屋で改めて見ると、随分大きなケーキでとても3人では食べきれない。夜の12時頃であったが、私がフロントに行って訳を話し、ケーキを半分差し上げると2人いたフロントの女性は「生日快樂!」と言って喜んでくれた。見も知らない人にまでお祝いを言われるのも嬉しいものである。異国の地でのこのような誕生日会は初めてで、心から嬉しく思った。

6日目の24日は成都市内観光であった。「武侯祠」、「寛窄巷子」、「春熙路」、「錦里」などの観光地を巡ったが、以前の旅行記(176号～179号)に書いたので今回は割愛したい。成都市は歴史と近代化を兼ね備えた綺麗な街で、私の大好きな街である。寛窄巷子の通りにある郵便局で日本の友人に、うまく着いてくれと祈りつつ、絵葉書を出した。この日の夕食も火鍋であった。

楽しい時間はすぐ過ぎ去るもので、最終日の10月25日になった。大連に帰る友人は早朝の便なので来年の再会を約し、それぞれ帰途に就いた。私は、現地時間9時5分発のANA948便に搭乗したが、流石に午前中の便なので銘酒「一ノ蔵」は置いて無かった。

(終わり)

いつの時代であろうと、その時の大勢の動きに文句も言わず、順応していることは難しいことではありません。しかし、その時代の政府や大きな流れに抗して発言し行動することはなかなかできないことです。とりわけ戦前の帝国主義的天皇制国家だった日本では、人々の言論や行動が徐々に規制され、時には命を取られるということもありました。そのような時代のなか、ローマ字化運動を展開し、ユニークな活動を貫いたために獄に繋がれ、若くして亡くなったエスペラントヒドカフティストがいました。その名は斎藤秀一です。

### ➤ 寺の息子として誕生

斎藤秀一は1908(明治41)年、山形県庄内平野の東南のはずれ、東田川郡山添村(現・鶴岡市)にある泉流寺という曹洞宗のお寺の子として生まれました。時代は日露戦争が終わって三年目、軍国主義がどんどんと突き進む時代でした。

徳富蘆花は、「一步誤らば爾が戦勝は亡国の始め」と、しっかりとその後の日本を予見していました。日韓併合、台湾占領、そして中国大陸へ、日本はわき目もふらずに侵攻し軍国主義への道を走り出していたのです。

秀一の父、秀苗は20歳で徴兵され、日露戦争に従軍しました。寡黙で厳格な父・秀苗に対して、秀一はおとなしく静かな少年でした。小学校を卒業して県立鶴岡中学に入学しました。ほとんどの子供たちは中学へ進学することもなく、小学校を出ると同時に働く人が多かった時代でしたから、そういう意味では寺の長男として秀一は恵まれていたというべきでしょう。

秀一が9歳の1917(大正6)年には、レーニンやトロッキーに率いられたロシアの労働者農民たちによるロシア革命が成功し、世界に大きな影響を与えました。日本政府はロシア革命をつぶそうとシベリア出兵を行う一方、日本国内では米騒動が拡大して

いました。大正の後半は大正デモクラシーと呼ばれる時代でもありました。

1923(大正12)年には関東大震災が起き、その混乱の中、アナキストである大杉栄と伊藤野枝、そして甥がどさくさまぎれに憲兵たちによって殺され、また多くの朝鮮人や中国人たちも殺されました。

### ➤ 文学青年として成長

多感な中学時代、秀一は絵を書く一方、読書にも熱心で、菊地寛や谷崎潤一郎の作品を読んで日本文学に傾倒しつつ、グリム童話やアラビアンナイト、ハムレット、レ・ミゼラブルなど海外の作品をも読むような文学青年でした。

学校の勉強以外では、雑誌に詩や短歌、俳句などをよく投稿して掲載され、それが楽しみでもありました。掲載された詩などを通して、各地の同好の青年たちと文通を始めたり、投稿の依頼も受けるほどでした。

1926年4月、秀一は駒沢大学予科に入学しました。駒沢大学の前身は、曹洞宗専門学校です。曹洞宗の寺の長男ということで彼自身はとりわけ望んだわけではないようでしたが、駒沢大学に進学しました。ここで秀一はエスペラントに出会います。

1927年5月の読売新聞に、「世界に向かって日本を紹介するにはエスペラント語によるべきであり、それは翻訳にもっとも都合のよい言語だからである」という主張が記された記事がきっかけでした。

その日の日記に「我が国を世界に紹介するのにエスペラント語が最も都合のよいものかどうか、私には判断しかねる。(中略)それにしても妙にエスペラントを研究したくなる」と記しています。そして翌年からエスペラント語に取り組むのでした。

秀一は世界の言葉をみんな知りたいというほど語学に関心が深く、1929年の夏休みには帰郷もせず、ロシア語の講習会に参加し、プロレタリア文

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」

第25回 大勢に抗して闘う斎藤秀一

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

学運動の理論的リーダーである蔵原惟人からロシア語を学んだりしました。しかし時代はだんだん右傾化していきました。1930(昭和5)年、『蟹工船』で知られたプロレタリア作家である小林多喜二が銀行を辞め、4月初旬、小樽から上京しました。その多喜二を歓迎する会が江口渙や秋田雨雀らによって開かれました。しかし警察は2月から7月にかけて日本共産党シンパの労働者や学生たちなど約1500名を逮捕するなど、大陸侵攻の準備を固め始めていました。

### ➤ エスペラントに取り組む

秀一は、地元の新聞『鶴岡日報』に3回に亘って「エスペラントについて」という文章が連載されるなど執筆活動も旺盛で、またローマ字の魅力につかれてローマ字運動に力を入れました。駒沢大学での卒業論文は、「片仮名の起り～歴史及びその将来」というもので、数多くの世界の言語が登場します。具体的に言えば、朝鮮、支那(中国)語、英、仏、独、露、マレー語、インディアン語、ラテン語、ポルトガル語、イスパニア語、琉球語、ドラヴィア語、サンスクリット語まで広がっています。

しかし駒沢大学東洋文学科を卒業したものの就職もままならず、故郷の山形県の山奥の分校教師になりました。秀一にとって帰郷は「敗北の道」のように思えました。しかし、どこの小学校でもローマ字を教えなかった時代、秀一は生徒たちにローマ字を教えました。

満州事変が起こり、戦争気分が充満する日本の中で、秀一の反戦の意志は強く、「二〇ページオ ヒラキナサイ ヒトゴロシ チュウギト オシエル ココロワ クライ」という歌を詠み、天皇の名において人を殺したり、自ら命を捨てる誤りについて批判しました。

プロレタリア作家同盟に入ろうかとする秀一にも警察の動きが迫り、1932(昭和7)年、初めて秀一は逮捕されます。地元の『荘内新報』は16日付で「東郡大泉校分校教場から／赤化教員三名検挙／ローマ字研究を名に文化闘争の／左傾化サークルを結成」という見出し、そして小さい本文の後「斎藤、塚田は直ちに解職」という小見出しが続きます。

今の時代なら考えられないほどのひどい状況が生まれていたのです。そして危険人物として秀一は特高の監視下におかれました。

### ➤ 闘うエスペランティスト

日本は、植民地にした台湾や朝鮮では日本語を強制的に押し付けました。政治支配は常に言語支配を伴っていたのです。秀一は、「文字と言語」などの論文を雑誌に執筆し、敢然と闘い、いわば「言語帝国主義」を批判しました。エスペランティストとして、また秀一研究者でもあった小林司(筆名・朝比賀昇)は、「言語帝国主義という単語をはじめて創ったのは、私の知るかぎりでは秀一であった」と書いています。

1930年代、日本のエスペラント界は、プロレタリア・エスペラント同盟と、日本エスペラント学会に大きく分かれていました。しかし官憲の弾圧を受けてプロレタリア・エスペラント運動は衰退していきました。

秀一はこう書いています。「民族と民族との間の不和をなくそうとしてエスペラントを作ったザメンホフの精神をば、今や日本のエスペランティストはきれ草履のように投げ捨てたばかりでなく、逆にエスペラントを民族の間の争いを激発するために利用している。この時にあたって我が国においてザメンホフ主義をあくまでも守ることは、頗る大きな意義をもっている」と書いています。

秀一は、被圧迫大衆の解放精神にもとづいて、エスペラント運動の範囲を広げ、それを国際的な文字改革の運動に高めようと格闘し続けました。エスペランティスト大島義夫は、「民族の独立はその独立をささえる大衆の思想と行動を統一するために、その民族語を確立しなくてはならないし、民族共通のことばを確立するには、文字とことばを大衆的に共通のものにすることがその前提条件になる」と書き、秀一は「日本のおくれた農村に生きるひとりのローマ字スト、エスペランティストが、その先頭に立った。彼のこの抜きん出た思想と果敢な実行とは、日本の暗い谷間のなかで挫折せざるを得なかった」と秀一について記しています。

(続く)

## 東西文明の比較(26)

▼来日した人々▲

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

遣唐使は、日本からの渡航ばかりでなく、外国人の来日を迎える通路でもありました。来日外国人には、一時的な滞在者から、日本に骨を埋めた人まで様々でした。唐についてみれば、外交使節はほとんど居ません。遣隋使時代を入れても、中央から皇帝の使いは608年の裴世清はいせいせいの一行、632年の高表仁の一行、778年の孫興進の一行の3回だけです。

その理由は、「日本の天皇が、中国皇帝から冊封されなかった」ことでしょう。

時代は下って明との国交があった室町時代、15世紀初めの約10年間に、9回の明使が来日、そのほとんどが明の官人

でした(足利氏は冊封された唯一の統領)。

東端に位置する小国のニッポンに、さほどの注意を払わなくても態勢に影響がないと皇帝は考えたのでしょう。日本はそれをいいことに、唐に対して外交上の名文を争うことを避け、国内では天皇を皇帝と位置づけたのです。従って唐の外交使節が来日すれば、抜き差しならない摩擦が生じます。特に律令制の完成後初めて、遣唐使を送って来日した孫興進一行の場合は、日唐の外交的対面が衝突しかねない状況でした。幸いなことに唐側の大使が乗った船が遭難して、行方不明になったため、決定的な対立にはならなかったそうです。

### 🏰 鑑真の来日

外国人、主に中国からの来日は、圧倒的に僧侶が多く、なかでも鑑真かんじんとその一行の来日は、質・量共に際立っています。

鑑真は、688年揚州で生まれ、708年、21歳で長安に赴き、具足戒を受けて正式な僧になりました。その後、揚州に帰り天台宗の学僧として、また戒律の実践者、研究者として、高い評価を受けました。40代半ばには、華中・華南で戒律にかけては並ぶものがないという名声を得ていました。

日本からの留学僧ようえい ふしゅう、栄叡と普照が、揚州の大明寺で鑑真に会い、来日を要請しました。そのとき鑑真は、かつて天台の高僧えしし慧思が、没後、当方の国で生まれ変わり、仏教を広めたとする伝承を心に留めていました。日本こそその国であり、戒律の栄えるべきところと判断した鑑真は、行く意志のない弟子たちを置き去りにして渡日を決断しました。

それから10年後、船の難破や妨害を5度も体験しても決意は固く、753年(天平勝宝五年)、遂に日本の土を踏みました。前年の遣唐使の帰国船に便乗しての来日でした。

当初、玄宗皇帝は、鑑真を招請した遣唐使(藤原清河)に対して、「日本は仏教ばかりに熱心で、道教を崇めていない」と不満を述べ、道士になる留学者を残すよう命じました。道教の受容を拒みたい日本側は、留学者を残すことは認めましたが、鑑真の招請は取り下げませんでした。鑑真の来日意欲に揺るぎがないことを知った遣唐副使の同伴古麻呂は、機を見て独断で自船に乗せてしまいます。

平城京に入った鑑真は、早速日本での受戒を一任され、東大寺に作られた戒壇院を拠点に、仏教界の頂点に立ちました。日本では仏教公伝以来、既に200余年を経ながら、受戒の作法が実施できなかったのです。受戒の作法とは「10人の正式な資格ある僧(三師七証)が立ち会って行う儀式です。大陸で受戒した僧や渡来僧はいても、ふさわしい僧を一挙に10名揃えることは無理だったのです。

鑑真来日には、14名の僧と3名の尼僧が同行していました。そこで一挙に受戒が可能になりました。東大寺に落ち着いたばかりの鑑真のもとへ、天皇は良弁を遣わし、「何人の律師がいるか」とたずねさせました。当時の朝廷が受戒作法の確立を大切にしていたかの証明です。

### 🏰 朝廷と鑑真

朝廷が鑑真に期待したのは、僧尼の身分を限定し、仏教を統制する手段として、受戒を利用することで。ところが、唐にいた頃の鑑真は、それと真逆で臨機応変に戒壇をつくり、盛んに受戒をしていました。鑑真から受戒した人は、僧俗あわせて4万人以上いたと言われています。

鑑真は、官僧になる人への受戒以外に、幅広く受戒



活動を行い、仏教を根付かせたいと望んでいたはず  
です。その証拠が「3千粒もの舍利」です。彼は日本で  
の仏教普及のために、膨大な舍利を携えてきたので  
す。鑑真としてはこの仏舍利を多くの戒壇に祀り、受  
戒の機会を広げてゆこうと考えていたのです。

しかし、朝廷としては、出家予備軍を増大させるよう  
な、鑑真の意欲を好ましいとは考えません。さらに、  
当時の官僧たちもその特権を失わないためには、僧  
侶への門は狭い方が都合がいいのです。こうして自  
由な受戒活動を許されないまま、鑑真は公職を免除  
され、大和上という名誉称号を与えられて、唐招提寺  
へ移ることになりました。

唐招提寺は、当初「戒院」「宿院」などと呼ばれ、具  
足戒を受けた僧が、律の実践を学ぶ場でした。「律」  
は僧侶の共同生活を維持する規則でしたから、その  
精神は共同生活をしていく中で、初めて体得されま  
す。その共同生活を支える費用は、東大寺時代から引  
き継がれた水田の収入でまかなわれました。ここで  
研修を受けた僧侶は、やがて地方へ赴任します。そこ  
で彼らは鑑真の「教え」を広めることになります。こ  
れが鑑真の最晩年の生き甲斐でした。

### 鑑真は何をもたらしたのか

戒律の受容では確かに限界がありました。しかし、  
鑑真が多くの弟子僧や多くの職人などを伴って来日  
し、唐全盛時代の文化を切り取る形で日本に紹介した  
ことによって、大きな刺激を与えることになりました。

一例として、木彫仏の定着が挙げられます。鑑真ら  
が新しい仏像を紹介したことが、奈良後期・平安時代  
にかけて、木彫の仏像が盛んに作られるきっかけと  
なりました。

もう一例。鑑真が天台宗の仏典を、まとめて請来し  
たことです。中国では長い歴史を持ち、唐代に流行し  
ていた天台宗が、その研究者によって移植されたと  
ころに大きな意味があります。のちに日本の天台宗  
を開くことになる最澄が、奈良で鑑真請来の典籍を  
学んだことは、決して偶然ではないでしょう。

### 鑑真の弟子たち

鑑真と共に来日した高弟ほっしんに法進したくと思託しやくがいます。  
また日本人僧えんけいの延慶えんけいについてだけ、記してみます。

法進は、鑑真の後を受けて、東大寺戒壇院の最高  
責任者になりました。鑑真は、自身の著作を残してい

ませんが、法進は日本の弟子に対して2冊の經典の  
注釈書を書いています。同じ律を学ぶといっても、唐  
と日本では社会環境が違います。そこで法進は経文  
の言葉を唐の風俗に照らして詳細に説明しています。  
歌舞・音楽、祭りの様子、賭け事、船舶などに関する  
解説は、戒律の書とは思えないほどのできばえで、唐  
代の史料としても一級品といえるでしょう。

思託は、師の伝記や古代の僧伝「延暦僧録」を記し  
ました。また後には大安寺で講義をしたり西大寺の  
造宮に参画しました。著しく唐風の強い西大寺伽藍  
は、彼の助言の影響でしょう。

延慶は、藤原仲麻呂ふじわらのなかまろの第6子よしお（刷雄）です。第12回  
遣唐使（752年）で留学するとき、一躍従五位下の位  
を与えられました。唐で鑑真に接するうちに、その人  
柄に傾倒したのでしょうか。出家して延慶と名乗り、鑑  
真に付き従って帰国、その通訳を務めていました。藤  
原仲麻呂が、天平宝字八年（764）に反乱（注）を起こし  
て敗れると、仲麻呂の息子たちはみな殺害されまし  
たが、延慶だけは死を免れ、還俗して壱岐に流刑にな  
りましたが、やがてそれも許されて図書頭、大学頭な  
どを歴任しました。

### 儒教・道教と仏教——私観ですが

ここに挙げました鑑真、そして中国密教の恵果。  
いずれもその時代の中国仏教界の超大物が、鑑真は  
直接日本へ、恵果は弟子1000人の中から、日本人  
の空海だけを選び、密教の全てを伝授しました。な  
ぜか？

儒教も道教も、生まれは中国です。それに対して仏  
教はインドの生まれです。この違いを両名は感じて  
いたのではないのでしょうか。仏教界の超大物の両名  
は、このまま布教活動を進めても「限界がある」「やが  
て消滅する」と。それならば、熱心な日本へ伝えよう  
との思いが、彼らの行動の原点だったような気がし  
ますが、いかがでしょうか？

#### ■注

藤原仲麻呂の乱：「孝謙上皇・道鏡」と「淳仁天皇・仲麻呂」  
との対立は深まり危機感を抱いた仲麻呂は、天平宝字八  
年自らを都督に任じ、さらなる軍事力の掌握を企てる。し  
かし謀反の密告があり、上皇方に先手を打たれて天皇の  
もとにあるべき御璽や駅鈴を奪われると、仲麻呂は平城  
京を脱出する。（Wikipediaより）

杜甫の五言律詩「春夜喜雨」

報告：花岡風子

今日のお題は杜甫の五言律詩「春夜喜雨」(春夜に雨を喜ぶ)でした。

杜甫の人生については、これまでも講座で何度か伺っては来ましたが、今回改めて色々お話を聞くうちに、杜甫という人は「ピント外れと思えるくらいの大望を抱いた、タイミングの悪い、偉大なるマジメ人間なのでは」と思ってしまいました。何せ、杜甫は唐の玄宗皇帝の側近になり、詩の力でもって皇帝を導き、善政を施させて「君を堯舜ぎょうしゆんの上に致す<sup>1)</sup>」という壮大な野望しゆんやを抱いていたのですから。つまりは玄宗皇帝を補佐するナンバー2になりたかったというわけです。

過去にも周公ほんれいや范蠡、諸葛孔明など輝かしい名ナンバー2を生んできた中国で、ナンバー2への憧れ、というのも分かりますが、杜甫は政治家として優れていたかと言うと、やはり詩人以外の何者でもなかったと言わざるを得ません。しかもタイミングが悪いことに、玄宗皇帝を天子と仰ぐには、時が10年遅過ぎたようです。な

ぜなら、杜甫が仕官を志し、都に着いた頃には、玄宗皇帝は既に楊貴妃にメロメロ。政治権力は玄宗皇帝自身ではなく、事実上側近たちの手に渡っていたのです。

一方、11歳年上の李白は幸運なことに玄宗皇帝の絶頂期に宮廷詩人として仕えました。しかし、余りにも気ままな振る舞いが多かったため、側近たちに妬まれ、追放に追い込まれます。玄宗皇帝は李白に多額の金品を持たせたうえ、泣く泣く李白を手放したそうです。

その李白の放浪中に杜甫は李白と一時期親交を結びます。その後、杜甫は都に行きますが、まともな仕官の道を得られぬまま、不運なことに程なく安祿山の乱に遭遇し、玄宗皇帝は失脚。次に即位した息子の肅宗に仕えようと着の身着のまま、行在所に馳せ参じたりして、やっと初めて左拾遺という、低いながらも皇帝に直言できる官位を得ます。ところが肅宗は杜甫が考えたような人物ではなかったようです。玄宗皇帝のように芸術

を理解するどころか、極めて実務的な君主でした。肅宗としては、玄宗のせいで破壊された王朝の秩序を取り戻すのが精一杯で、杜甫の期待に応える余裕など無かったのかもしれない。

結局のところ、杜甫は左遷の憂き目に遭います。その後、家族を連れて長い長い流浪の旅に出て、苦難の末に、漸く落ち着いた先が蜀の地、今の四川省の成都でした。そこで古い友人たちに出合い、草堂を建ててもらったりして、しばし安住の地を得ます。その草堂で書いた詩が今回の「春夜喜雨」なのです。

この時期に書かれた杜甫の作品は、

chūn yè xǐ yǔ  
春夜喜雨

dù fǔ  
杜甫

hǎo yǔ zhī shí jié  
好雨知时节

dāng chūn nǎi fā shēng  
当春乃发生

suí fēng qiǎn rù yè  
随风潜入夜

rùn wù xì wú shēng  
润物细无声

yè jīng yún jù hēi  
夜径云俱黑

jiāng chuán huǒ dú míng  
江船火独明

xiǎo kàn hóng shī chù  
晓看红湿处

huā zhòng jīn guān chéng<sup>2)</sup>  
花重锦官城

しゅんや  
春夜に雨を喜ぶ

杜甫

こうう  
好雨时节を知り

すなわ  
春に当たって乃ち発生す

ひそ  
風に随いて潜かに夜に入り

うるお こま こえ  
物を潤し細やかにして声無し

やけいくもともくら  
夜径雲俱に黒く

こうせんひひとあ  
江船火独り明かし

あかつき くれないうら  
晓に看る紅湿う処

おも きんかんじょう  
花は重し錦官城

落ち着いた心境で自然の恵みを詠んだものが多い、という特徴があります。一方で、この詩には当時の杜甫の複雑な心境が行間に滲み出ているようでもあり、そのことが作品に一層の深みを与えています。

これは五言律詩です。律詩は八句で構成されます。この詩の前半の四句はすべて雨を擬人化した奇抜な始まりです。後半四句は杜甫の目を通して見た世界です。いつのまにか前半と後半で主体が入れ替わっているのです。前半が聴覚、後半が視覚と見ることもできます。しかも全体に緩やかな時間の推移が見られます。暗から明へ、後半の色彩表現も鮮やかです。

偶数句の末尾で韻を踏む。平声で韻を踏み、仄声で韻を外す。典型的な律詩スタイルです。韻字は生、声、明、城。何れも平声「庚」音に属します。平仄の方式は、最初の句の二字目が仄声で始まる仄起式をとっています。形式的にも内容的にも完成された美しさを持つ、数ある杜甫の名作の中でも、絶品の一つといえます。

今回の漢詩の会では、後半はひたすら朗読の練習をしましたが、これを杜甫の心情を滲ませて読むのは難しいものです。「読み方一つで全く詩の雰囲気が変わってしまうね」植田先生はそう呟きながら、一行ずつ味わい深いお手本を示して下さいました。「ところで、人生をうまく渡った人はいい詩人になれない。かつて権力者だった王安石も失敗して故郷に帰った時の詩が良いんだよ。権力の絶頂にある時は良い詩を書けない。だから安倍さんには書けないだろうねえ、安倍仲麻呂には書いても」植田先生のジョークに一同深く頷きました。

だいたい芸術家というのは、世渡りは滅法下手で、不遇な人が多く、世間的には変人だったりしますね。でも、とことん自らの魂の内面を抉り出す、その直向きの勇氣と純粋さが常人を越えているからこそ、それが言葉となって、何千年も国境

を超えて人の心を打ち続ける所以なのでしょう。

この「春夜喜雨」の現代語版を大胆にも風子バージョンで書いてみました。

なんて素敵なお雨なんだ。

春のちょうど良い頃に、しかも  
皆が寝静まった夜に風とともに、  
密かにやって来るとはね。

世界に潤いを与えて、しかもその存在を  
消したかのように、音もなく、  
(まるで、あの人のようではないか。)

野道も雲も闇にかき消され、  
川に浮かぶ船の灯りだけが、  
暗がりの中で

ポツと明るく目に入る。  
朝靄の中に、赤く潤う此処かして  
雨に濡れそぼった錦官城の花が  
いかにも重そうだ。

(ああ、我一人、憧れしかの孔明が活躍せし錦官城を想う。自分の人生は結局、あこがれのナンバー2にはなれなかったけれど)

華々しい世界の裏側で打ち捨てられたかのような、素朴な人間らしさに深い味わいを感じる今日この頃です。

地味なのに壮絶、且つ、ちっぽけであると同時に壮大でもある。人間の存在そのものに通じるものがあるからなのでしょう。

## ■注

- 1) **君を堯舜の上に致す**：原文は「君致堯舜上」。杜甫の自作詩「奉贈韋左丞丈二十二韻」(韋左丞丈に奉り贈る二十二韻)より。
- 2) **錦官城**：成都の別名。三国時代、四川産の錦織物を管理する役所があったのでこのように呼ばれる。錦は蜀王朝の主要な財源でもあった。

# 雨のソウル旅行—①

(2018年5月15～19日)

関根 茂子

昨年は、北朝鮮情勢が不穏なので、例年のS姉主催の韓国山旅は計画されなかった。今年は南北融和のさざしがあり、5月15～19日の旅に誘われる。

今回の第1の目的は「浅川巧(たくみ)」のお墓に行く、次にソウルの雲岳山に登ること、さらに江華島の小さい山を歩くこととおおまかの計画が示された。

「浅川巧」って何者？ 出かける前にネットで検索すると、ソウルナビではページ下の囲みの如し

浅川巧の生涯を描いた日韓共同制作の映画『道～白磁の人～』(2012年公開)を見たS姉や前回の山旅でいっしょだったK姉、M子は次回の韓国山旅で浅川巧のお墓に行ってみたいと話していたようだ。

そこで、付け焼刃ではあるが、映画の原作：江宮隆之『白磁の人』の改訂版『冬萌の朝一新・白磁の人』を読み、さらに、高崎宗司『朝鮮の土となった日本人浅川巧の生涯』も読んで、登山予定の雲岳山(ウンギル山)610mの情報もネットで入手して準備を整える。参加者は韓国語が操れるS姉、ハングル勉強中のTさんと私の3人。現地では文盲状態の私は事前調査ぐらいしか役に立てないのだ。

出発直前にソウルの天気予報をチェック。到着日だけ晴、その後の4日間はすべて雨、それも90%とは最悪の予報だ。雨天の登山は事故の元。博物館めぐりにしよう、ソウルの博物館をネットで調べた。

国立民俗博物館も国立中央博物館も、ラッキーというか「世界博物館の日」記念により、5月11日(金)～20日(日)は無料入場とある。2つの博物館を各1日ずつまわって、1日は韓国人の共同墓地に浅川巧ただ一人眠る忘憂里(マンウリ)公園墓地に行けばいいだろうと勝手に決めたのだ。

## ■5月15日(火) 晴

成田1320発のアシアナ航空は1時間以上も遅れて飛び立ち、仁川着18時前。空港案内所の日本語を話せる案内嬢にホテルからの迎えの車の手配電話をかけてもらい、車が来るまでに現地共同資金に1万円を両替(約10万₩[1ウォン≒0.1円])、事前に航空券とホテル4泊代41,300円と合わせ5万円強の旅が始まった。

常宿の仁川スカイホテルまでは車で10分、ベッドはシングルとダブルの2つでシャワー室だけだ。機内で遅い昼食が出たので、夕食は涼麺(6500₩)で軽く済ませ、ホテルで明日の行き先を検討。明日から2連泊の宿から歩いても行かれる景福宮(キョンボックン)に併設の国立民俗博物館で相談がまとまる。

## ■5月16日(水) 小雨曇後雷雨

8:00スカイホテルから仁川空港に送ってもらい、まずは、今宵の宿アットホームがある鍾路5街(チョンノオガ)まで地下鉄で移動するのだ。

ソウルの電車は無人化、切符は事前入金のカード式、デポジット料金500₩は後で精算機に入れれば返金される。改札口の装置にカードをタッチして、入口の回転バーを体で押し入出場する。ソウル市営地下鉄は路線が色分け、駅に番号がふられている。路線図をよく下調べして、乗換通路の数字と色を追って進めば行きつける仕組みだ。音楽で乗換駅到着を知らせてくれるのもありがたい。

ホテルのある鍾路5街(チョンノオガ)駅で手持ちのカードをタッチしても出口のガードが開かない。係員はどこにもいなく2枚のカードを手にして途方にくれる私たち。と、年配のおじさんが出口ゲート横の機械にカードをタッチ、ヘルプ通路が開いて出られ助かった。駅近くにあるはずのホテルが見つからず、地図を示して道を尋ねると誰もがスマホで電話をかけ

◆浅川巧とはどんな人？… 1891(明治24年)、山梨県で生まれ、1914(大正3)年、23歳で日本統治下の朝鮮に渡ります。朝鮮では林業技師として緑化事業につとめながら、兄である伯教(のりたか)の影響もあって朝鮮工芸の美に魅了され、「朝鮮白磁」をはじめとする工芸品や民芸品の収集や研究を行い、日本に紹介しました。また兄や朝鮮の芸術を愛した美学者の柳宗悦と共に景福宮内に「朝鮮民族美術館」を設立、朝鮮陶磁器や家具の収集と保全に尽力しました。この美術館は現在も同じ景福宮の中にある国立民俗博物館に引き継がれています。浅川巧は私生活でも現地のことを深く理解しようと日本統治下にありながら朝鮮語を学び、韓服を着て、現地の風俗や人に親しみ、周囲の人から敬愛されたそう。1931(昭和6)年、病気のため40歳という若さでこの世を去りましたが、生涯を朝鮮に尽くし、「韓国人の心の中に生きた」日本人として韓国でも知られています。そんな浅川巧の人生は2012年、映画「道～白磁の人～」として映画化されました。

(ソウルナビから)

てくれ実に親切だ。何人もの韓国人の手助けでやっと目指すホテルに到着できた。

この宿は日本語が通じるから安心だ。不要の荷を預けて、小雨降る中、空港で入手したソウル公式観光ガイドブックを手に11:00景福宮へ向かう。

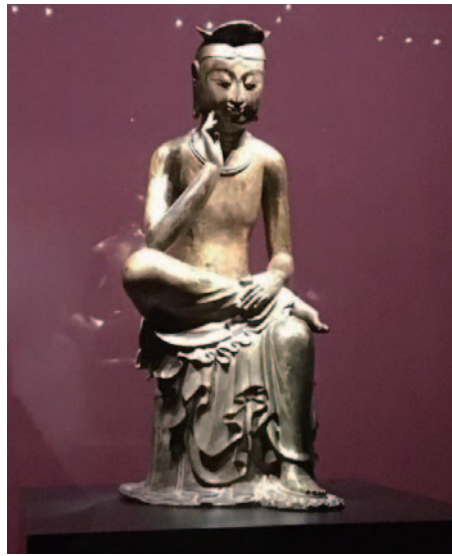
地下に1号線が走っている大通りを西に歩き、宗廟(チョンミョ)広場公園を過ぎると金の装飾品を扱う店が立ち並び鍾路3街(チョンノサムガ)だ。ついでタブコル公園(1919年3月1日に独立宣言文を読み上げた歴史的な場所)がでてきた。

11:40光化門(クァンファムン)広場に着くころには、雨は小止み状態、北に折れると、李舜臣(イ・スンシン) 将軍=秀吉の朝鮮侵略の危機を救った救国の英雄の巨大な銅像に圧倒される。さらに世宗(セジョン) 大王の像まで歩いて光化門の近くにくると、雷鳴が聞こえ大粒の雨が降り出した。あわてて、通りの向こうの光化門に逃げ込む。雨宿りの大勢の人の中にはきれいなチマチョゴリに身を包んだ観光客も交じていた。1時間以上降りこめられているうちに、残っているのは数人、私たちも景福宮入口に傘をさして行くと国立民俗博物館の入口は別だった。左のバス駐車場の先、三清路(サムチョンロ)を北上して博物館入口にたどりつく。庭園を巡り朝鮮古民家の縁先に腰を下ろしてひと休み後、本館建物に入る。日本語案内は15時から1時間というので、喫茶室で時間待ち後、男性係員のガイドで第3展示室の朝鮮時代の貴族階級・両班(ヤンバン)の一生の展示を見て回る。韓国時代劇に出てくる王様、貴族の服の色が階級を表している、丸は太陽で王様、四角は大地で臣下の印、文官は鶴、武官は虎の模様とか興味深い話が聞けた。

残りの展示室を回って17時過ぎに退館、同じ道に戻るのつまらないと、三清路を渡って東へ進む。韓国風民家を改造した飲食店やギャラリーがある起伏のある歩道を、適当に歩いていく。昌徳宮(チャンドクン)の通りに入る鍾路3街の貴金属通りを左折、18:00無事にホテル帰着。

## ■5月17日(木) 雨

目覚めるとやはり雨だった。朝食は11階で無料提供



国宝の半跏思惟像  
(トリップアドバイザーから)

のパンとコーヒーと牛乳、ヨーグルトで済ます。

8:30さて、ロビーに下りると、雨が激しくなり、S姉は雨具上下を私はスパッツを取りに部屋へ戻る。

9:00過ぎ国立中央博物館の最寄りの二村(イチヨン) 駅に到着、10:00開館と同時に入館すると日本語ガイドの女性が待っていた。不要の荷物をロッカーに預け展示館入場前に手荷物検査を受ける。

まず吹き抜けの三階まで聳える十層の石塔が目を引く。ガイドは黄金に輝く「新羅金冠」や9メートル

を越える「野外儀式用仏画」など見どころの展示物を要領よく案内してくれる。なかでも広隆寺や中宮寺にある有名な弥勒菩薩半跏像にそっくりの国宝の半跏思惟像は見事だった。あっという間に一時間が過ぎ、後は私たちだけで見て回るようになった。

3階の喫茶室(コーヒー 4000₩)でひといき入れ、まだ見ていない展示室を観覧していると、会話を聞きつけた日本人ボランティアガイドの声がかかる。彼女の案内で新安海底文化財室を再度見学、鎌倉末期に東福寺が仕立てた交易船が新安海で沈没、粘土質の浅い海に積荷の景德鎮をはじめ各地の焼き物や銅銭が大量に埋もれていた。引き揚げられた品々がここに展示されていたのだった。日本室には皇族に列せられた李王朝の末裔が蒐集した北斎の版画や有名日本人作家の絵画、彫刻が展示されていた。

最後に青磁や白磁の焼き物を観覧する。通勤ラッシュが始まる前にホテルに帰ろうと16時過ぎ外に出ると雨がまた降りだした。鍾路5街(チョンノオガ) 駅から大降りの雨の中を歩いて帰る。

博物館観覧も結構疲れるものだ。ひと休み後、夕食にと外出。地下鉄駅の大通りの向こう側に渡るとおいしいそうな匂いが漂うチヂミを焼いて食べさせる店が立ち並んでいる。海鮮チヂミ(ヘムルパジョン)1枚15000₩、アツアツでおいしかった。食後、奥に歩くと左手には魚類や乾物など商う市場があった。ウロウロしていると「何かお困り事がありますか」と若い女性に声をかけられる。ソウル市の日本語対応観光ガイド嬢だ。英語対応のガイド嬢の2人連れで見回っているとのことだった。

(続く)



## 海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑥)

高島 敬明

約1年に亘るノボロシースクにおける仕事の中で、寺島儀蔵さんとの出会いは一番心に残る出来事でした。1909年に根室の近郊で生まれた氏の人生を概観しますと—26歳の時、ロシア革命の理想を信じ樺太からソ連に入ったものの現実は理想と大きく異なった。28歳の時、スパイ容疑の冤罪で逮捕されて以降46歳の時(1955年)に釈放されるまでの18年間収容所で過ごす。釈放後、望郷の念から幾度も帰国申請をしたが、その都度却下され日本国籍も認められなかった(最終的にはソ連国籍しか認められなかった)。しかし希望を失うことなく、忘れそうになる日本語の勉強を怠らなかったのである。そして83歳(1993年)になってついに帰国が叶ったが、監視下での38年間の苦難を知るとき、第二次世界大戦前後の過酷な人生に耐えた精神力には頭が下がるばかりである(自著「長い旅の記録」から)。

さて、寺島儀蔵さんをYプロマネの部屋に案内し、Oサブマネも呼んで4人で顔合わせしました。寺島さんは次のような自己紹介をされました。

「私は戦前からロシアに住むようになり、戦後は日本人の通訳をして暮らしています。カスピ海のバクーでは東芝の電算機設置工事、レニングラードでは小松製作所のプレス据付工事、モスクワでは日立製作所の機械工場の立ち上げ、と工事現場の仕事を主にしていました。モスクワでは日本から来られる人たちの通訳もしていました」。

家族の事や住んでいる所など話されましたが、流石にどこに盗聴器があるかも分からないし政治的な話はお互いに避けた。

1953年のスターリンの死後、フルシチョフやゴルバチョフの時代が来ても人々が期待していた自由の風はそよとさえ吹きませんでした。寺島さんが話を続けられる中で、時々地名や簡単なロシア語が出てきましたが、日本から引き連れてきた3人の通訳と全く発音が違うのが我々にも分かりました。お会

いしたのは1978年ですが寺島さんは1935年からソ連で生活しているのですからネイティブに近いわけです。

お互いに打ち解けた雰囲気になりましたが、夜の帳も下りてきたのでプロマネから「寺島さん、今日はこのブリガンチーナホテルにお泊りください。明日港の現場宿舎にご案内します」の声で、今日の顔合わせは終わりました。遅くなって宿舎に帰り班長を交えてサブマネから指示された寺島通訳の部屋割りについて話し合いました。彼はこれから現場の責任者の手足となり、日夜行動を共にしなければなりません。結局私の隣部屋で同じタイプの部屋を一人用に割り当てました。

翌朝寺島さんを交え、事務所全員での打ち合わせを行いました。寺島さんを紹介しましたが、皆さん、特に3人の女性通訳は強い味方を得たとばかりにとっても喜んでいました。というのは、3人の通訳はソ連側との意思疎通がうまく図れなかったり、また男ばかりの現場なのでなかなか彼女たちの思うように動いてくれないことが多かったからです。

紹介後、Yプロマネから、「寺島さんは高島さんの現場の通訳を優先してください。事務所の通訳の仕事は必要に応じてお願いします」との指示があり、ミーティングは終了しました。そのあと寺島さんを現場に案内しました。現場まで2kmの道すがら、60代の年齢とは思えないほど飄々としてお元気で喜びにあふれていました。私を感じるには、日本人としての通訳の仕事に誇りを持っていましたし、日本人としての日本の発展を自慢しているようなところもありました。兎に角現場での心配事であった通訳の問題が解決したのには感謝するばかりでした。

それからすぐでした。配管工事、塗装工事などの作業員がどんどん入って来ました。当初の15人から50人、100人と一挙に増えたわけですから予想もできないような問題が起こって来ます。問題を解

決するには海運省に文書で申し込まなければなりませんので、寺島さんは大いに力を発揮されました。例えば以前申し込んだシャワーのお湯についての問題が発生しました。

「日本人は一日に何トンのお湯が必要か?」と再度文書で質問を受け、前と同様に一人当たり20リットルのお湯が毎日毎日必要なことをうまく寺島さんが文章を作成し提出しました。ロシア人は毎日風呂に入る習慣は無いようです。今度はボイラーを取り換えるそうで全国の海運省に手持ちのボイラーが無いか問い合わせる、との回答があったようです。計画経済なので年度初めに計画していないものはすぐには設備できないそうです。

人数が一挙に増加して、一番心配したのが皆さんの健康管理です。それまでは夜など病人が出た場合には、ブリガンチーナホテルに電話で指示を仰いでいたのですが、寺島さんが来られてからは同じ宿舎にいる彼から今までのソ連社会の体験から非常に適切な指示を頂けるようになりました。



ここで当時のソ連の医療事情について、いくつかの例をお話しましょう。

◆寮生が病気になると寺島さんが病院に同行されますが、日本から工事で来られた方だからと、順番を飛ばしてすぐに処置をしてもらいました。町では有名な工事でしたし、寺島さんの語学力によるものだと思います。病院で最初に感じたことは男性のお医者さんがいなかったことです。これはソ連の医療事情にもあるようです。4月号に書きましたがこの街には6000人の看護婦養成学校があります。看護婦を6年間経験するとドクターの資格がとれるそうです。どおりで血圧も満身に測れない医者もいました。そのためか医療は非常に遅れているとのことでした。



ノボロシースクは風が強い街で、風速40mの風が吹く。ちぎれそうな現場の「鯉のぼり」

◆日本人がある地方で歯が痛み耐えられず帰国となりましたが、モスクワで辛抱できなくなり痛み止めだけでもと歯医者にかかりました。医者は痛む歯の隣の正常な歯を抜いてしまったそうです。あごをパンパンに腫らして成田についてすぐに救急車で病院に運ばれたそうです〈寺島氏談〉。

◆ノボロシースクの病院は膝や腰の痛い非常に肥満した女性の入院でいっぱいでしたが、そこに以前尿道結石をしたことのある寮生を連れて行きました。

本人は非常な痛みで吐き気まで訴えましたが、女医の処方薬は薬を出すでもなく、「ビールをたくさん飲み、とんだり跳ねたりしなさい」とのことでした。帰国後日本の先生にその処方を聞きましたが、これは道理にかなっていると笑っていました。

◆治療が無難だったのは、少しのケガの治療です。日本の赤チンはソ連では青い色をしています。患部にそれを塗って終わりです。軟膏はまずなかったように思います。白い包帯から青い患部が見えると何か異様な感じがしました。寺島さんの勧めもあり医者には極力掛からないようにして、ただ病気にならないことを祈るばかりでした。

◆ある寮生は痔が悪化し、女性の通訳と一緒に病院に行ったそうです。通訳の言うには、「大きめの洗面器に冷たい水を入れて患部を冷やしなさい」と言ったそうです。寮生は、「もう一度医者に聞いてください。日本ではとにかく温めなさいと言われますが…」と言ったそうですが、同じ答えが返って来たそうです。国によって治療法が違うのでしょうか!

このような医療事情の下で、我々は健康に気を使い頑張ったわけですが、次号は現場で発生したいくつかの事故を書く予定です。

(続く)

黄土高原に住む人びとは、先祖伝来の土地に住み着き、黙々と祖先からの農耕技術を受け継ぎ、世代を引き継ぎながら、この土地特有の文化を育んできたのです。天の神に順応して、季節ごとに自然の恵みが例年と同じようにもたらされることを祈りながら生きてきました。

このように祈り、恩恵を期待する文化では、文字による記録は生まれず、彼らの文化は、各世代から世代へ口で伝えて、心で受け継ぐ方式で引き継がれ、彼らの血潮の中に、細胞の片隅に生き続けていくのです。生活の厳しさや、苦しい体験で得たものが、潜在的な意識となり空中に希望の楼閣を描き出します。

冠婚葬祭・生殖崇拜は、家族の存続と繁栄を左右する行事です。神霊崇拜で、家族の平穏と安泰を祈り、病気・災害に見舞われないことを願います。竜王崇拜は、一年の天候安定・五穀豊穡への祈りです。更には、竈の神・土地の神を崇拜することで、各家庭の家畜類が増えてゆき、果実が実り、天候が穏やかであるようにと祈ります。

このような時、黄土高原の住民としての特性が剪紙・布堆画のモチーフとなります。製作者の経歴や経験の違いなどから、作り出された作品はそれぞれ異なっていますが、だからこそ民間伝統文化といわれ、いわゆる“無形文化遺産”と称されるものなのです。

高鳳蓮は、一般の人と比べて、より困難な人生を歩み、紆余曲折を経験しているので、彼女が精神的な支えを必要とする時、彼女の眼前には、意識の中に潜在していた太古の、宗教的で伝説的な、言葉では言い表せない図柄が、より強く、突如浮かんでくるのでした。

高鳳蓮の作品には、古代の神々を想像させるよ

うな剪紙もあります。神の世界を垣間見るということは、過酷な生活を経験した人々のみが会得する、満ち足りた生活への渴望と幻覚ですが、高鳳蓮の想像力と創作技術があって初めて、私達にそれを感じさせてくれるのです。

高鳳蓮が素晴らしいのは、重苦しい精神的な重圧下でも、作品は開放的で、優しい、落ち着いた気分が満ち溢れていることです。

高鳳蓮も陝北の普通の女性であり、喜怒哀楽の情、様々な欲望も持ち合わせていますが、一方では、負けず嫌いで、何事にも毅然として立ち向かう、強い意思が彼女の生活全般を支えています。高鳳蓮は、農作業ばかりでなく家事万端、時間を無駄にせず、マントウを蒸している時にも同時に何か手仕事をしているといった風で、あちこちに目を配りながら家事を進めていきます。

ある日、高鳳蓮は家族のためにマントウを蒸かしていました。成形したマントウを蒸籠の上に乗せ、蒸気が上がるのを待つ間、物置から、内側にアルミ箔を張った西鳳酒(白酒)の箱を見つけて来ました。

箱を切り開いて平に伸ばし、ハサミで必要な形を切り出しました。その間に、蒸籠から蒸気が上がり、ふっくらと大きく膨らんだマントウが出来上がりました。そして、先ほど切り出したアルミ箔付き厚紙は、蒸し器の蓋の壊れたところを塞ぎ鍋の修理が終わりました。

こんな風に、高鳳蓮は待ち時間がある時は、必ず他のことをしています。決して無駄な時間は作りません。高鳳蓮は、やはり黄土高原陝北の典型的な女性の一人なのです。

彼女の夫は、これまた典型的な陝北農民で、勤勉で農業一筋に打ち込んで来ましたが、そんな夫





畑に向かう高鳳蓮さん



惜しみなく剪紙の技術を披露し指導する



高家のリンゴは大きくて甘い



テレビ局が度々高鳳蓮の取材で訪問する

と共に、高鳳蓮も農業にいそしみます。彼女の自慢は、リンゴと葡萄です。彼らのリンゴは、近隣の農民が作るリンゴより大きく甘いと評判です。彼らは苗木から、いろいろ工夫をして丹精込めて育ててきました。

剪紙作家としての高鳳蓮は、今や押しも押されもしない第一人者です。彼女の名声を慕って、外国から訪ねて来る人や、芸術を勉強している学生たちがひきも切りません。そんな時、彼女は気軽に剪紙の技を披露し、学生たちにはその知識を惜しげもなく与えています。

メディアもまた、高鳳蓮を様々な切り口で人々に伝えようと、度々取材に来ます。そんな時、高鳳蓮は昔の苦しい生活を思い出しながら、それらの日々を、懐かしさを込めて、楽しそうに語るのです。

毎日の生活は、最近ますます快適になり、目の前に浮かんでくる昔の苦しい生活も、今の高鳳蓮にとっては、楽しい思い出です。

高鳳蓮が最も異彩を放つのは、紙の切れ端を使って動物や飾り物を剪る時です。紙きれの形に合わせて、気負うことなく、鋏の赴くまま、手の動くに任せて、勢いに乗じて、思いがけない形が切り出されます。これは、他の人にはまねのできない分野です。

高鳳蓮の住む白家台を訪問する時、私はいつも黄土高原でもより西安に近い、渭北地方に住む庫淑蘭老人のことを思い出していました。私は、この庫淑蘭のところへも何度か訪問したことがあり、彼女が制作する様子を親しく見せてもらったことがありました。庫淑蘭が剪紙を制作している時は、無我の境地に陥り、きらびやかな姿をした剪紙の仙女が、彼女の頭の中から飢餓や苦痛、世の中のことを追い出してこの世の楽園に導いてくれたような気持になるようです。此の楽園で庫淑蘭は、世間一般の欲得を忘れ、社会生活上の悩みや困難から解放され、身も心も軽くなり、思いっきり歌を歌

いたい気持ちになるそうです。こんな激しい快感は、同席する“剪纸仙女”信者の人々にも伝わって行きました。

高鳳蓮が他の剪纸作家と違うところは、彼女には大きな夢とそれを実現する壮大な計画があったことです。彼女は、生きているうちに自分自身の芸術殿堂を建設し、自分の一生の作品を後世に残したいと考えました。これは庫淑蘭に啓発されたものでした。

庫淑蘭も、生前自分の作品を集めて“剪纸仙女”の殿堂を作りましたが、庫淑蘭が世を去ると、時間と共に、この殿堂も雲散霧消



高鳳蓮艺术馆の入り口

してしまっただけでした。これを見て、高鳳蓮は全財産をつぎ込んで、自分自身の手で“高鳳蓮艺术馆”を建設し、終に夢を実現させました。

高鳳蓮は、他の人達と違って、人々が築いた富は、全て炎帝・黄帝の子孫、つまり中国人民の財産であり、ひいては陝北黄土高原の財産であると考え、自分の全財産を惜しげもなくつぎ込んだのでした。その内、人々は立派な碑を建てて中国芸術史上における高鳳蓮の足跡を記憶に留めるようになるでしょう。

(終わり)

**【会員の活動短信】** 「漢詩の会」の報告を頂いている花岡風子さんから楽しいおたよりを頂きましたのでご紹介します。

私の住んでいるマンションでは様々な部会活動があります。「子育て部会」では、年間行事として梅雨のこの時期に室内で子どもたちが体験できる催しを毎年開催しています。

今年は‘わりい’活動や、会誌への挿絵で皆さんもよくご存じの満柏先生をお招きして「水墨画体験会」をしました。(一昨年は私が指導して水餃子の会をしたのですが)去年は‘わりい’会員の有為楠さん、木之内さんに来ていただき手作りの月餅を教えてもらい、二年連続、‘わりい’のご縁でお世話になり活動しました。

「水墨画体験会」は18人の参加者があり、親たちも参加しましたので結構な人数でワイワイやりました。

満柏先生は、子供達にも教えるのが本当にお上手で「芸術的だね」とか「素晴らしいね」とか、「ピカソだね!」とか先生に褒めてもらって子供

たちは楽しんでどんどん描いていました。

満柏先生の穏やかでステキな人柄に大人も子供たちもすっかり魅せられて、みんなとても喜んでいました。

(報告：花岡風子)



満柏先生とツーショット



作品を手に嬉しそうな参加の皆さん

## ■第126話：作文

先生：「次の作文の題は、『ある日のサッカーの試合について』です。ちゃんと思い出して上手に書くように」

小明は長いこと考えていました。が、何も思い出せず、何も書けないで困っています。作文用紙には、「天気：雨。地面がぬかるんで、試合は延期」と書いてあります。

## ■第127話：授業

ここはシンガポールです。先生が生徒に言いました。

先生：「漢字はちっとも難しくありませんよ。この字を見てご覧。これは“羊”と言う字です。羊には、頭に2本の角があるでしょう。漢字にもちゃんと角が2本あります。分りましたか？」

生徒：「分かりました」

先生は続けて、教えました。

先生：「これは牛という字です」

生徒が訊ねました。

生徒：「牛は、どうして角が一本だけなのですか？」



## ■第128話：作文の時間

先生：「『私が今までに見た、一番美しいもの』という題で、作文を書いてみましょう」

学生が書きました。

「私が今までに見た、一番美しいものは、言葉では言い表せない美しさでした」

## ■第129話：あめ(糖)という字

弟がお姉さんに訊きました。

弟：「ミルクキャンディーの“あめ(糖=キャンディー)”という字はどう書くの？」

姉：「ココアキャンディーの“あめ”という字と同じよ」

弟：「ココアキャンディーの“あめ”という字はどう書くの？」

姉：「それは、クルミキャンディーの“あめ”と同じよ！」

弟：「クルミキャンディーの“あめ”という字はどう書くの？僕は書けないよ！」

姉は少しイラつきながら

姉：「ココナッツキャンディーの“あめ”字と同じよ！」

弟：「ココナッツキャンディーの“あめ”字も、僕は、未だ書けないよ！」

姉：「チューインガム(橡皮糖)と同じ字よ。そんなことも分からないの？」

弟：「お姉ちゃん、僕は未だチューインガムの“あめ”字も書けないよ！」

姉は声高に言った。

姉：「じゃあ、バナナキャンディーやオレンジキャンディーの“あめ”という字は書ける？」

弟：「書けない！」

姉：「じゃあ、ミルクキャンディーの“あめ”字は？」

弟：「僕が訊いているのは、その字の書き方なんだよ！」

姉：「私だって、この字は書けないわよ！」



## 【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これとは思うイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

## 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。皆様からたくさんの切手をお届け頂き感謝しております。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、ついでの折に田井にお渡し下さい。

‘わんりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。年度途中からの入会は会費の割引があります。気楽にお問合せください。

年会費(4月～3月)：1500円 入会金なし  
郵便局振替口座：00180-5-134011

主としてアジア各国から来日の方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し、文化的交流によって国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：044-986-4195 (寺西)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田市民フォーラム4F・町田国際交流センター、町田生涯学習センター6F、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

## 〈講演〉「論語」から学ぶ言葉の力 参加者：33名

2018年6月3日(日) 川崎市・麻生市民センター 講師：植田渥雄先生

「麻生サークル祭」が、今年も麻生市民センターで開かれました。昨年と同様に午前10時半、「『論語』から学ぶ言葉の力・その2」と題して植田先生の講演はスタートしました。今回は昨年を上回る受講者で会場はほぼ満席となりました。本講座では、まずプロローグとして「『論語』とはどんな書物か」「孔子とはどんな人物か」「春秋時代とはどんな時代か」について、昨年とは違う切り口で噛み砕いた説明がありました。

春秋時代とは、BC.770～BC.476年。今から約2500年位前という、気の遠くなるような昔です。天下を統率していた周王朝の権威が衰え、大小様々な国が乱立し、秩序が大いに乱れた時代を孔子(BC551年～BC479年)は生きたわけです。

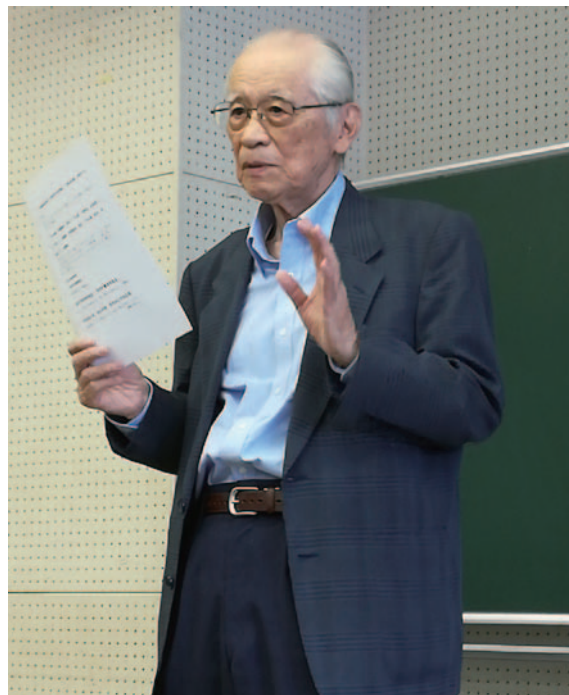
言葉も価値観も乱れた事態に直面して、孔子はその現実はどう立ち向かったのでしょうか。ここで先生は、最近発生した某大学のアメフト部の記者会見で、監督が「乖離」という表現を使ったことに触れられ、「これは発言者とそれを受け止めた人との考えの不一致、誤解を言うのでしょうか、孔子の生きた時代もそのような時代と言えるのではないかと思います」と言われ、皆さん2500年前の雰囲気垣間見た気分……。

孔子は、『春秋』(歴史書)を編むことにより言葉の乱れを正したと言われていますが、乱れを正すには、言葉は一字一句正しくかつ簡潔に、という姿勢を貫きました。では孔子はどのようにして弟子

たちを正しく導こうとしたのでしょうか。

当時は、当然まだ紙の書物はない時代です。竹や木に文字を書いて、それを麻糸で繋ぎ合わせ、丸く巻いたものが書物でした。従ってこのような書物は重い上に持ち運びにも不便です。今の文庫本一冊と同じ内容を木片に書けば、とても一人では背負いきれません。したがって確かな知識を身に付けるには、丸暗記しかありません。そこで孔子は弟子に教える際、いくつかの覚えやすくする工夫をしていたのです。一つは対句的な表現で「対比話法」を用いました。その例をいくつか見てみましょう。

★『学而不思則罔、思而不学則殆』—(学びて思わざれば則ち<sup>くら</sup>く、思うて学ばざれば則ち<sup>あや</sup>殆うし)。「先生の真似をするだけで、自分で考えることをしなければ確かな



講義をする植田先生

知識は身に付かない。] 自分勝手に考えるばかりで相手の考えを学んで受け入れなければそれは危険である。つまり、人から学ぶことと自分で考えること、そのどちらが欠けてもだめだ、ということです。先生は「この句は全部で12文字ありますが、6字が前後で対になっていて、更に分けると2文字ずつになります。中国語で読むとリズムがよく、音楽的にも、意味的にも、覚えやすいように工夫されています。」といわれ、実際に中国語で発音されましたが、これなら確かに覚えやすいと皆さん納得。

さらに「学」に関連して「学習」という文字の意味の説明がありました。「学」とは「真似ること」、「習」は「この字の原意は、ヒナが巣立つため何度も



満席の視聴覚室

羽ばたく練習をする。つまり自ら飛ぶすべを身に付けるまで稽古をすること」だそうです。「学」と「習」について、『論語』の初頭に書かれている次の有名な一句を見てみますと、

★『学而時習之、不亦説乎？』—(学んで時に<sup>これ</sup>之を習う。また説<sup>よろこ</sup>ばしからずや)。まず先生の真似をして、それを繰り返しながら知識を確かなものとして身に付けていくことは嬉しいことだ、となります。「説」は、「悦」と同じ意味。「時」は、「その都度」の意味。あらゆる技術や芸能、スポーツも同じこと。頭で考えるだけでなく、繰り返し練習して着実に身に付けていくこと。喜びはその中にあります。

★『君子和而不同、小人同而不和』—(君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず)良きリーダーは、融和を求めるが同一を求めない。凡庸の人は同一を求めるが、融和を求めない。つまり、互いに立場や性格の違いを認め合った上で和合できるかどうか、という話です。この例は友人関係のみならず、政党間や国家間、民族間、異文化間にも当てはまりますね、そして夫婦間にも、と植田先生。対句的な表現は確かに記憶に残りますね。句の前半だけでも意は伝わりますが、対照的なフレーズを並べることで、内容をより正確にかつ鮮明に相手に印象付けることができます、とも。

弟子が覚えやすくするための二つ目の工夫は、「豊かな感情表現」の句にしていること、だそうです。その例として3句挙げられましたが、その中で昨年の講演でもお話のあった次の句を見てみますと、

★『巧言令色鮮矣仁』—(巧言令色鮮いかな仁)。言葉をうまく飾り、顔色をうまく取り繕う人には、仁徳のある人が少ないなあ)。この句の中で「矣」という文字は、文末に用いる文字で、断定や慨嘆に使いますが、倒置法で「仁」の前に置くと、思いの込もった豊かな感情表現となり、「～なんだよなあ」といったニュアンスになるそうです。

他にもたくさん句が紹介されましたが、紙幅の関係で割愛させていただきます。ここに紹介した句だけでも孔子の人となりや、言葉をいかに正確に弟子に伝えようと腐心したのかが分かるような気がしますね。

講座で植田先生は、『論語』はこれまで何百回も読みましたが、読む度に、新しい発見があります。また2500年前の人の考えが今の世にも生きていることは驚くべきことですね。先を見通す眼力は素晴らしいとしか言いようがないです」と話されました。講演の時間は12時までの1時間半でしたが、植田先生のユーモア溢れるお話に時の経つのを忘れ、次のグループが準備に入るため、質問時間が取れなかったのが残念でした。

◆あさおサークル祭り報告

**ボイス・トレーニング** 参加者：14名  
2018年6月3日(日) 川崎市・麻生市民センター  
講師：Emmeさん

今年もEmme先生のボイストレーニング公開講座で、サークル祭りに参加しました。

部屋が例年と違い、奥まった第一会議室ということも影響したのか、参加者は14名と少な目でした。

まず、頭から足先まで十分ストレッチをし、滑舌の練習の後、胃両脇辺りの筋肉の動きを意識しながら超低音から超高音まで発生をしていくと、声がどんどん出るようになって、皆、笑顔でした。その後「手のひらを太陽に」を元気良く歌いました。Emmeさんの快活でわかりやすいご指導のもと、皆楽しい時間を過ごしました。

◆わんりいの講座

**中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

▲まちだ中央公民館 10:00～11:30

7月29日(日) 第3・第4学習室

※8月の講座はお休みします。

▲講師：植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、  
現桜美林大学孔子学院講師)



▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

\*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

**初心者体験のお誘い【鶴川水墨画教室】**

季節の花など描いて暑中見舞いの用意をしませんか。体験参加1000円です。手ぶらで参加OK! 見学は無料です。気軽に教室を覗いて見よう!!



●講師：満柏(会長)

●場所：鶴川市民センター  
小田急線鶴川駅「北口」から徒歩3分  
195-0062 町田市大蔵町1981-4

※駐車場あります

●曜日・時間：毎月第2、第4(月)  
14:00～16:00

●体験参加費：1000円  
(見学無料/手ぶら参加可)

●問合せ：  
☎042-735-6135(野島)

**継続25年【わんりい中国語勉強会】(中級)**

'わんりい'活動の母体として始まった中級程度の勉強会です。楽しく中国語を学んで25年になります。テキストによる学習のほか中国語でのフリートーク、作文、聞き取りなどもやっています。見学は連続4回まで無料です。

●場所：鶴川市民センター  
(町田市大蔵町1981-4 駐車場有)

●日時：毎週火曜日(月4回)19:00～21:00

●会費：月額5,000円(授業料・会場費など)

●講師：郁唯(天津師範大学卒)

◆テキスト：「风光汉语・中级口语Ⅱ」(北京大学出版)

◆問合せ：☎042-735-2717(三澤)

E-mail: fwjg1705@mb.infoweb.ne.jp

◆わんりいの催し

**ボイス・トレをして日本の歌を美しく!**

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう!! 声は健康のバロメーター! 気持ち良く歌って毎日元気!

まちだ中央公民館 10:00～11:30

●7月31日(火)  
●8月21日(火) } 視聴覚室

★動きやすい服装でご参加ください

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



**会員募集!【网上中国語勉強会】**

中国語は世界の共通語!  
皆で楽しく中国語を学ぼう!!

●場所：麻生市民館 岡上分館  
又は、岡上いこいの家

●日時：毎週土曜日10:00～12:00

●会費：5,000円

●講師：劉冠群(北京出身)

◆問合せ：☎044-865-3757(久保田)

E-mail: tizm2005@gmail.com(久保田)



**会員募集!【まちだ中国語入門サークル】**

和気藹々と中国語を勉強しているサークルです。楽しみながら中国語を始めませんか。見学ご希望の方は気軽にお問合せください。

●場所：町田中央公民館(原則として)

●日時：第1・第2・第4土曜日  
10:00～12:00

●会費：3,500円/月3回

●講師：郁唯(天津師範大学卒)

◆問合せ：☎042-725-3963(森川)

E-mail: ymorikawan@ybb.ne.jp



**会員募集!【町田中国語講座】**

ここなら継続できる中国語講座がある。ピンインの読める方、是非!!

●場所：町田文学館・ことばランド(原則として)

●日時：第1・第2・第4土曜日14:00～16:00

●会費：4,000円/月3回

●講師：郁唯(天津師範大学卒)

◆問合せ：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail: t\_taizan@yahoo.co.jp



## I 江西省文化年第二弾! 「江西省新余市版画展」

- **場所**: 中国文化センター 港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F 日比谷線神谷町駅4a番出口より徒歩5分/銀座線虎ノ門駅2番出口より徒歩7分
- **会期**: 7月10日(火)~7月20日(金)10:30~17:30(初日15:00から、最日は13:00まで/土日休み)



江西省文化庁との協力による「江西省文化年」・第二弾「江西省新余市版画展」は、新余市自然風景・社会風景などを題材にした版画作品40枚を展示。新余版画は1940年代に、魯迅が提唱した中国新興木版画運動の影響を受け大きな発展を遂げた。中国改革開放の後、中国の多くの美術展で受賞し、嚴廬、陳祖煌、藍人傑、陳伯程など内外に名だたる版画家を輩出している。

■ **開幕式**: 7月10日(火) 15:00~ ◆ **申込み**: 中国文化センターのイベントサイト <https://www.ccctok.com/event> 電話の場合⇒☎03-6402-8168

- **主催**: 江西省文化庁、中国文化センター、新余市文化放送新聞局
- **運営**: 新余市美術館、新余市版画名家アトリエ

## II 中国戯曲シリーズ講座 (講演言語日本語)

360を超える数多くの地方伝統演劇があり、1万以上の演目があるといわれている中国戯曲を知ろう。



- **第6回** 昆劇の魅力、現役の昆劇俳優が語る 世界無形文化遺産 中国昆劇を知る  
講師: 陸海栄 7月11日(水)15:00~16:30

◆ **申込み**: 中国文化センターHP「イベント案内ページ」 <https://www.ccctok.com/event>

## III ドキュメンタリー映像 「一帯一路」(日本語吹き替え版上映)

CCTV(中国中央電視台)制作のドキュメンタリー「一帯一路」全6話(各約60分)を、3日間の日程で上映

- 7月17日(火) 15:00~ 第一話・運命共同体 第二話・通じ合う道
- 7月18日(水) 15:00~ 第三話・光明の絆 第四話・富への道
- 7月19日(木) 15:00~ 第五話・金融ネットワーク 第六話・シルクロードに夢を築く
- ▲ 各日先着30名、要申込、無料 自由席
- ▲ 座席によってはスクリーンが見えにくい場合あり。▲ 入場チケットの発券なし。

◆ **申込み**: 中国文化センターHP「イベント案内ページ」 <https://www.ccctok.com/event>

### 「三菱アジア子ども絵日記フェスタ」

未来に生きる子供たちが、国際的な感覚を早くから学び身に付けられるように、外国の、とりわけアジアの子どもたちが描いた絵日記をパネルにして展示。きっと日本の子どもたちも大いに刺激を受けるのでは? 是非、ご家族でお出かけを!

- **会場**: 町田市立第五小学校。町田市多摩川学園4-14-7 小田急線玉川学園前北口15分 ☎042-725-8178
- **会期**: 6月25日(月)~7月9日(月)
- ◆ **問合せ** ☎042-710-1171

- **主催**: まちだ・さがみユネスコ協会
- **共催**: 町田市立第五小学校



### 料理講座「インドネシア料理の会」

9月25日(火) 場所: 麻生市民館料理室  
参加費: 1,500円 講師: ロサリタ

昨年、6月に開催して好評頂いた、インドネシアの首都ジャカルタ出身のロサリタさんによる「インドネシア料理」の講習会が決まりました。詳細は、9月号でお知らせしますのでご予約ください。

### 第4回上海工芸展in日本 上海絨繡画工芸展

絨繡とは、東洋の手工芸と西洋芸術が融合して誕生した、ウール100%の毛糸で刺繡する手工芸をいう。当展覧会では「東洋の油絵」とも称される上海絨繡画50点を展示する。

- **会場**: 日中友好会館美術館 <http://www.jcfc.or.jp/shisetsu/museum>  
東京都文京区後楽1-5-3 後楽国際ビル1F  
☎03-3815-5085
- **会期**: 7月18日(水)~24日(火)(会期中無休)  
10:00~17:00(初日15:00~/最終日12:00迄)

#### ● 開幕式と製作実演

7月18日(水)15:00~開幕式  
15:45~ 製作実演

#### ● 絨繡体験教室 絨繡パンダを作って見よう!

指導: 来日絨繡作家  
7月19日(木)14:00~16:00

- ▲ **要 事前申し込み** 定員16名 小学生以上対象  
☎03-3815-5085(日中友好会館文化事業部)

● **主催**: 上海工芸美術博物館/(公財)日中友好会館 他

◆ **問合せ** ☎03-3815-5085

参加無料

### 青花・永遠の美 景德鎮明清官窯復刻展「宮廷のコバルトブルー」

●場所：日中友好会館・美術館 〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3後楽国際ビル1F ☎03-3815-5085  
●会期：6月20日～7月12日(月曜日・休館)10:00～17:00 (6月20日15:00開幕式&内覧会 6月22日は20時まで開館)

1700余年の陶磁器生産の歴史を誇る都、景德鎮。磁器を英語で「チャイナ」と呼ぶように、宋、元、明、清といった時代に花開いた名品は、今もなお、世界で愛されている。



中国磁器の発展には、宮廷、官用の御用器の専用工房である官窯かんようの存在があったといわれ、特に、明清時代にはそれぞれ御器廠ぎよきしょう、御窯廠ぎようしょうといわれる官窯で優れた匠の技術と素材の贅を極めた名品が数多く生み出された。明清時代の作品を古の技法に忠実に一点一点、手作業で復刻し、現代に甦った景德鎮明清磁器およそ100点を紹介。



●主催：(公財)日中友好会館 / 景德鎮市人民政府  
☎03-3815-5085 メール：bunka@jfc.jp

### 町田国際交流センター 「設立20周年記念式典」 ～どなたでも参加可能です～



- ▲第一部 記念式典 13:30～14:45
- ▲第二部 記念演奏会 15:00～15:45
- 会場：町田市民フォーラム 3Fホール
- 場所：7月29日(日)
- ◆問合せ：☎042-722-4260 (町田国際交流センター)

- 町田国際交流センターの歩み
- 1998年7月、町田国際交流センターの前身・町田国際協会設立。地域に暮らす外国人支援、交流、各種講座、国際理解、協力などの事業が始まる。
- 2004年4月、町田市における文化活動の拠点・町田市民ホールの事業運営の町田市文化振興公社と町田国際協会とが合併し、財団法人町田市文化・国際交流財団設立。以降、財団として市民ホールの事業運営と町田国際交流センターの業務を行い、地域に居住する日本人と外国人市民との友好親善の絆を深め、文化の薫り高く国際感覚豊かなまちづくりを推進する。
- 2011年4月、公益法人制度の改正に伴い、一般財団法人町田市文化・国際交流財団となる。


- 町田国際交流センター会員募集
- 個人会員：2,500円(4月1日より翌年3月31日まで)
- 学生会員：1,000円(4月1日より翌年3月31日まで)
- 個人賛助会員：2,500円(一口)
- 団体賛助会員：10,000円(一口)
- \*年度途中入会も会員資格は3月31日までになります。
- \*入会は所定の郵便振替で申し込むか直接、センター事務局(町田市民フォーラム4F)でお申し込みください。
- ◆問合せ ☎042-722-4260 (町田国際交流センター)

### ‘わんりい’ 235号の主な目次

「寺子屋・四字成語」(14)門前成市 ……………2  
 論語断片(38)「進むは吾が往くなり」……………3  
 天府の国・四川省(5)竹海から成都市内へ……………4  
 混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(25)…6  
 東西文明の比較(26)来日した人々……………8  
 「漢詩の会」(22)杜甫の五言律詩「春夜喜雨」…………10  
 雨のソウル旅行・上……………12  
 海外出張の思い出・日ソ連⑥……………14  
 黄土高原に咲く目にも彩なる花々 XI……………16  
 会員活動・短信……………18  
 中国の笑い話……………19  
 2018 あさおサークル祭報告……………20  
 ‘わんりい’ 掲示板……………22・23・24

### 【7月・8月定例会開催日及び9月号‘わんりい’発送予定】

- ◆問合せ：☎044-986-4195(わんりい)
- 定例会：7月12日(木) / 8月10日(金)  
13:30～ 鶴川三輪センター・第三会議室  
\*定例会は‘わんりい’会員の皆さんはどなたでも参加できます。
- 9月号‘わんりい’発送日8月31日(金)10:30～  
三輪センター・第二・第三会議室  
\*おたより発送日は弁当持参です  
三輪センター地図 <https://www.postmap.org/map/556789>

 間もなく猛暑の季節がやってきます。どうぞご自身の体調に心配りをして楽しい夏の思い出を沢山作ってください。‘わんりい’ 8月号はお休みいたします。